

## 教員養成における教職課程についての一考察

—勝田守一の教育学との比較に基づいて—

### One observation about teacher training programs of a university

丹後昌子\*

TANGO, Masako\*

#### はじめに 一問題意識と課題設定一

今日、教師を志す者は、教育職員免許法で定められている教職課程を履修しなければならない。彼らには、教育の課題や現状を知る必要がある。そのために、教職課程を履修し、教職課程に規定されている諸科目を学ぶということは有効であろう。また、このことは、将来教職に就くために不可欠な自らの学習課題に気付き、それに向き合う良い機会にもなるのではないだろうか。教職を希望する者にとって、これは必須の準備期間に相当する。その課程で履修する授業内容は、どのようなものになっているのだろうか。これらの内容については、教育職員免許法施行規則に規定されているが、それは教育に関する学問であり、教育学から導きだされている。ここで、教育学と教職課程との関係がどのようになっているか、という疑問が出てくるが、これについては、後で詳しく述べることにする。

ところで、教育学には様々な分野が存在する。それは教育に関するあらゆる研究や課題、実態を学ぶための学問であるため、その分野の広大さは計り知れない。例えば、教育は人間になぜ必要であるのか、という教育の必要性に関する本質的な研究や、不登校、いじめ、学校へのクレームなど、今日の日本で注目されている教育課題に関する研究、子どもの発達や社会における教育の役割に関する研究など、これらの全てが教育学で扱われている。つまり、教育学とは教育の全ての事象についての学問的研究なのである。それゆえ、教育学の全てにわたって、深く学ぶということはきわめて難しいことであろう。

しかし、将来教育に携わろうとしている人間が、教育学とは何か、ということについて考えることは、極めて大きな意義がある。なぜなら、教育を実践する際に、眼前に立ち現れる問題には、何らかの理論が必要となる。教師という立場の人間が教育について考える場合、教師を支える理論は自分の経験から導かれた理論か、他者によって教えられた理論のどちらかであろう。教育に携わろうとしている人間にとって、教育学は後者に属する。我々人間は、一般に自分の経験を目の前の課題の解決に役立てるが、それは、

意識的、無意識的に関わらず行っている。しかし、他者の理論を実践に活かすには、まずは意識的にその理論を受け入れ、理解しなければならない。他者の理論を集大成したものが教育学であるとすれば、どのような視点をもって教育学を学ばよいのだろうか。また、教育学は教育実践においてどのような意味で有効性を発揮するのだろうか。これら2つの観点から教育学を捉えなおし、実際に教職課程に規定されている科目内容を探る必要がある。

この問いにせまるためには、教育学と教職課程の内容の関係について考察しておく必要がある。冒頭でも述べたように、教育学が教育の全ての事象についての学問的研究であるならば、教職課程で取り扱われている科目もまた、教育学から導き出されたものといえよう。それゆえ、教育学が取り扱っている内容とは酷似、または全く同じといっても良いだろう。しかし、本来的に教育学を学問研究として学ぶ者と教職課程を履修する者では、目的が異なるため、学ぶ内容が全く同じではない。そこには、本来的に教育学と教職課程の存在意義の違いがあることが窺える。それゆえ、教職課程はその内容がいかにより将来の教師にとって、有効であるのか、つまり教育実践上の課題に役立つ理論であるかどうか、という観点からその意味を考えることが重要であろう。ここに、教育理論と教育実践を不即不離なものとして捉える視点が求められる。

教育学を長きにわたって研究した人物の一人に、研究者である勝田守一(1908-1969)がいる。彼は、30年以上にわたって、教育に関するあらゆる問題にとりくもうとした研究者であり、その著書は79冊にも及ぶ<sup>1)</sup>。彼の教育に関する研究分野は幅広く、主な研究分野だけでも教育学や学力に関する研究、社会科教育、道徳教育、学校論、教師論などが挙げられる。

本研究ノートでは、上述したように教育学と教職課程の関係を理解するために、勝田が体系化した教育学と今日の教職課程で取り扱われている科目内容の観点から比較する。この比較に基づいて教職課程における科目の偏重や過不足、教育現場における有効性や課題などについて考察する。

\* 武庫川女子大学大学院文学研究科教育学専攻院生

(Postgraduate student, Mukogawa Woman University Graduate school of education)

なお、教育学の概念、分野、領域などを整理するためにここで第一次史料として採用するのは勝田守一の著作、『教育と教育学』（岩波書店、1970）である。『教育と教育学』では、そもそも教育学とはどのような学問であるのか、という根本的な問いから始まり、その概念、方法、課題、思想などについて言及されているため、教育学を根本から捉えようとする際にふさわしい一冊であるといえよう。

また、この『教育と教育学』が出版されたのは1970（昭和45）年であり、本研究で採り上げる第一章「教育の概念と教育学」の執筆活動が行われたのは、1955年から1965年ごろである。日本で、初めての学習指導要領となる『学習指導要領一般編（試案）』が発表されたのが、1951（昭和26）年であるため、執筆活動が行われた時代とは、戦後に生まれた学習指導要領がようやく軌道に乗り始めた時期に相当する。それゆえ、教育学という学問を今一度その輪郭から考えるという点において本書に着目するということは有効であろう。

さきほど、「教育理論と教育実践を不即不離なものとして捉える視点が求められる」と述べたが、教育学による理論が教育実践にそのまま役立てられるかといえ、それは現実的には困難である。教育学で取り扱われている具体的な研究内容について言及する前に、まずはこの理論と実践が二分化し易い原因について考える。

### 1. 教育学による理論が実践に還元し難い理由

勝田は、教育学を「教育の理論」と呼んでいる<sup>2</sup>。カントの「人間は教育によってのみ人間となる」という言葉にあるように教育という営みが、人間になるための営みであるとするならば、教育の歴史は紀元前から始まっている。教育学は、そのような膨大な過去の実践や研究のうえに成り立っている。教育学が「教育の理論」であるならば、その内容量も膨大なものになるだろう。そして、その時代や国、社会背景が異なれば、実践から生まれた理論であるにも関わらず、再び実践に活かすことが難しい場合もある。これが、問題視されている理論と実践の二分化ではないだろうか。この二分化を避けるために、我々は教育学を学ぶ際にそれらの理論の背後にある、時代背景や社会背景までもを可能な限り考慮に入れながら理解する必要があるだろう。

上述で述べたように、教育学とは、膨大な過去と実践を持っている。それらを実践に活かす際は、その時代や社会背景までを考慮に入れながら理解しなければならない。これらが不十分であると、教育学が教育実践で有効性を発揮するための障害になっているのではないだろうか。

このような課題が存在することを念頭におきながら、次に勝田による教育学の分類と内容を見ていくことにしたい。

### 2. 勝田守一の体系化した教育学の分類

勝田は、「教育学は、教育に関する様々な分野の研究や歴

史、実践などから成り立っている。それぞれの研究が持つ領域は、教育という現象に母領域の諸科学の問題設定や方法にもとづいて接近したものである。（中略）したがって、現状では、教育学とはあたかも複数の教育諸科学を一応包括する総括名辞にすぎない<sup>3</sup>と述べている。そのうえで、彼は教育学を「教育的諸価値とその現実課程の研究」、「隣接諸科学との接点」、「教育の歴史的研究」といった三つの領域に分類し、さらにそれを構成している要素を挙げて、教育学の扱う具体的な研究内容を明らかにした。彼が体系化した考えをまとめると、表1のように表すことができる。この分類から窺える特徴は、研究内容の重要性に応じて列挙していることであり、それは今日の教育学に通じている。彼は、第一に「教育的価値とその実現過程の研究」についての領域を設定している。この領域は、現行の教育制度や教育課程を示し、現実的な教育の目的、方法などを取り扱っている。第二の「隣接諸科学との接点」では、第一の領域に次いで重要な領域である。第三の「教育の歴史的研究」では、第一と第二の領域をさらに幅広く進化させる研究である。

表1 勝田による教育学の体系

領域	研究内容
教育的諸価値とその実現過程の研究	①教育概念の形成と教育的諸価値の吟味 ②教育目的の現実的規定 ③教育の内容および方法の研究 ④制度および政策研究 ⑤教師についての研究
隣接諸科学との接点	①発達および学習の心理学的研究 ②学習と人間形成の社会学的研究
教育の歴史的研究	①教育的価値の成立 ②教育の比較研究

出典: 勝田守一著『教育学』（青木書店、1958, pp. 45-50）に基づき筆者作成。

それでは、以下、勝田の「教育的諸価値とその現実過程の研究」「隣接諸科学との接点」「教育の歴史的研究」の研究内容を簡単に要約することにしたい。

#### (1) 教育的諸価値とその現実過程の研究<sup>4</sup>

この領域では、「教育概念の形成と教育的諸価値の吟味」、「教育目的の現実的規定」、「教育の内容および方法の研究」、「制度および政策研究」、「教師についての研究」の五つの研究が分類されている。

##### ①教育概念の形成と教育的諸価値の吟味

これは、「教育原理」や「教育哲学」と呼ばれる領域に相当する。我々はそれらを批判と吟味の対象にしなければならず、それと同時に政治学・社会学・心理学

等の成果を人間形成の視点から総合する任務を持つ。

## ②教育目的の現実的規定

子どもや青年の全面的成長をささえる諸条件と人間性の実現をはばむ諸条件との相互規定の中で、教育の目的にかんする現実的な諸規定の研究である。

## ③教育の内容および方法の研究

「教授学」や「教育課程研究」などと呼ばれてきた、教科の学習指導・教材論に関する領域である。教育の内容および方法が、教育の目的に即して、子どもの発達段階に応じて研究の対象を構成する。この領域の研究では、心理学的・社会科学的諸研究の目的統一の視点が重要になる。なぜなら、子どもの発達、生理的・心理的であるとともに、社会的・歴史的に規定されるからである。

## ④制度および政策研究

教育課程の物質的諸条件を規定する教育的慣行としてのあるいは法的に成立するその制度、その制度を規定し、意味づけを変更し、あるいは改革する政策、政策の基底およびその結果としての財政を対象とする領域である。ここでは、教育実践との相互関係が矛盾を含みながらも成立すると同時に一方で、一般的な政治・行政・経済との関係を含んでいる。

## ⑤教師についての研究

教師は、子どもの意識的指導者として、教育目的および方法・内容の統一的作用の主体として、あるいはその人格化された形象として探究されなければならない。教師の実践記録は、現実の諸規定のもとにおける教師の本質に触れる重要な教材である。しかし、この領域ではそれらに加えて、教員養成制度、教職員にかんする法的諸規定、給与体系、出身階層、教員の職務・労働量、教員組合運動などについての現実的分析も行われる。これらの統合として、教師の社会的性格、歴史的役割、要求される資質などについて研究が行われている。

## (2) 隣接諸科学との接点<sup>5</sup>

この領域では、「発達および学習の心理学的研究」と「学習と人間形成の社会学的研究」の二つの研究が挙げられている。

### ①「発達および学習の心理学的研究」

子どもの精神発達の理論的研究および人間の諸能力についての心理学的研究にささえわれ、学習心理学の成果にもとづきつつ、文化遺産の内面化の過程として

の諸教科の学習過程の研究を指す。よって、教育的価値は、研究に統制的原理としてはたらくと同時に、その成果として価値を実証的に検証し、それを豊富にする。また、学習は一定の学級やグループを場として行われるため、集団力学や小集団の社会心理学的研究との関係が重要になる。

### ②「学習と人間形成の社会学的研究」

「教育社会学」と呼ばれる領域の大部分がこれに関係している。学習の場としての社会諸集団の統制機能と社会的・文化的諸条件のもとでの人間形成の研究は、教育学の研究に重要な寄与を期待することができる。また、それ自身が教育政策に技術的基礎を与えるという意味で、この研究は重要である。

## (3) 教育の歴史的研究<sup>6</sup>

この領域では、「教育的価値の成立」と「教育の比較研究」の二つの研究が挙げられている。

### ①「教育的価値の成立」

人間存在の歴史的諸条件に規定されつつ、教育の諸価値がどのように形成されたかを研究することを通じて、教育概念を歴史的に究明する研究である。

### ②「教育の比較研究」

これは、比較教育学と呼ばれる領域にあたる。この比較教育学では、国際的視野に立つ現代教育史として捉えられる。それは、教育概念の内容を豊かにし、精密にすることに役立つ。よって、現実的課題にこたえる理論的研究となることができる。諸国の教育制度や学校数や財政やカリキュラムや方法などのたんなる形式的な比較ではなく、それらが他の諸条件との関係においてどのような教育的価値現実の保障となるか、それともそれを阻害しているか、という点における究明を歴史的意識にもとづいて明らかにする。

以上が、勝田によって体系化された教育学の領域である。しかし、現実になされている教育という営みは、このように単体の領域ごとに存在するわけではなく、それは統合的にな形で行われている。よって、一つひとつの領域にいかにか精通していようと、それらの理論を実践で扱うためには、領域ごとの理論の共有が重要となってくる。

また、教育学という分野に近年、「教育臨床学」などの新たな領域が出現したことにも注目したい。目の前にある教育課題が日々変化していくように、時代によって教育学の領域や研究は、変化していこう。これは、何ら不自然なことではない。なぜなら、教育学は、最終的には実践に役立てられることを目指しているであろうし、また実践か

ら新たな理論が生まれるものだからである。

それゆえ、勝田が行ったように教育学を整理し、それらを包括的に捉えることで教育課題の解決方法を導き出そうという姿勢は重要である。ただ、それらを統合的に用いる能力は、最終的には実践者である教師の手に委ねられることになる。

それでは、上記のことを踏まえたくて、現行の教職課程の内容について、以下、考察を行うことにしたい。

### 3. 現行の教職課程の科目領域および科目内容

教育職員免許法施行規則には教師免許を取得するために必要な習得単位と科目名が規定されている。そこでは、「教職に関する科目」として、「教職の意義等に関する科目」、「教育の基礎理論に関する科目」、「教育課程及び指導法に関する科目」、「生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目」、「教育実習」、「教職実践演習」といった6つの領域に分類されている。これらが、現行の教育職員免許法施行規則で定められている教職課程の領域と科目である。

また、これらは、幼稚園教諭・小学校教諭・中学校教諭・高等学校教諭に関する規定であり、特別支援学校普通免許に関する科目と単位数は、別に規定されていた。それらの免許の中から小学校教諭の免許取得に必要な科目のみに焦点をあて、それぞれの科目でどのような科目内容がとりあつかわれているのかを整理したものが次の表2である。

表2 教員免許取得に必要な教職に関する科目

科目の領域	科目内容
教職の意義等に関する科目	教職の意義及び教員の役割 教員の職務内容 進路選択に資する各種の機会の提供等
教育の基礎理論に関する科目	教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想 幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程 (障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。) 教育に関する社会的、制度的又は経営的事項
教育課程及び指導法に関する科目	教育課程の意義及び編成の方法 各教科の指導法 道徳の指導法 特別活動の指導法 教育の方法及び技術 (情報機器及び教材の活用を含む。)
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	生徒指導の理論及び方法 教育相談の理論及び方法 (カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。) 進路指導の理論及び方法
教育実習	
教職実践演習	

表2から読み取ることのできるように、学問として学ぶ領域は、「教育実習」と「教職実践演習」を除いた「教職の意義等に関する科目」、「教育の基礎理論に関する科目」、「教育課程及び指導法に関する科目」、「生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目」の4領域である。さらに、これらを分類すると「教職の意義等に関する科目」、「教育の基礎理念に関する科目」と「教育課程及び指導法に関する科目」、「生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目」の2つに分類することができる。前者の2領域は簡略すると「教職の意義」と「教育の理念」と表すことができる。これは目的についての科目であるといえよう。後者の2領域は、授業中に取り扱うかそうでないかの違いはあるが、どちらも教授や指導を行うための方法論であるといえることができる。それゆえ、今日、規定されている教職課程は「目的」と「方法」という2つの観点から編成されていると推測することができよう。ここから、これらを履修する者に、主に「教育の目的」と「その方法」について学んでほしいという、政府の意図を読み取ることができる。この意図は、果たして適切なものであろうか。この疑問にアプローチするために、この教職課程と先ほどの勝田の体系化した教育学との比較を試みる。この比較から、勝田によって体系化された教育学はどのような課題を投げかけてくれるのだろうか。

### 4. 教職課程と勝田教育学との比較

勝田の体系化した教育学と現行の教育課程を比較し、分類すると表3のようになる(次頁参照)。この表では、現行の教職課程を中心とし、そこで取り扱われている各科目が勝田教育学のどこに位置づけられるかを示したものである。

もちろん、一つの科目は、複数の領域によって成り立っている。それゆえ、構成している科目の中でも、主な構成科目であると思われる領域を優先的に書き出している。

表3の領域に着目して見てみると、「教育的諸価値とその実現過程の研究」と「隣接諸科学との接点」が「教育の歴史的研究」よりも多いということがわかる。また、領域ではなく、研究内容に着目してみると、「③教育の内容及び方法の研究」、「⑤教師についての研究」、「①発達及び学習の心理学的研究」、「②学習と人間形成の社会的研究」の4つの研究が多いことがわかる。これら4つの研究内容を分析すると、「③教育の内容及び方法の研究」は「方法論」、「⑤教師についての研究」は「教師論」、「①発達及び学習の心理学的研究」と「②学習と人間形成の社会的研究」は「子ども論」とも言い換えることができる。そうであるならば、現行の教職課程でより多くの時間を費やしているのは、「方法論」、「教師論」、「子ども論」などの具体的かつ有効的であると思われる研究内容が多い、ということである。ここから、現行の教職課程での「目的論」と「方法論」を比べ

ると「方法論」の方に重きが置かれているということがわかる。それゆえ、「目的」についての研究内容が不十分ではないかという課題がここで浮上する。

### おわりに

以上、勝田守一の教育学に関する見解を元に教職課程の科目内容について考察した。勝田の述べたように、教育学が「教育の理論」であるならば、その情報量は生半可なものでない。それゆえ、我々は、教育学のどの領域・科目に関心を重視すればよいのかという課題が生まれる。また、教育学を学ぶに際して、冒頭でも述べたように、そこで得

た理論をどのようにして実践へ活かしていくのか、という課題も付随的にでてくるだろう。

さらに、そもそも「教育学とは何か」という課題もでてくる。我が国で、はじめて、「教育学」という名称の書物が刊行されたのは、1882（明治15）年の伊澤修二著『教育学』であった<sup>7</sup>。その内容は、大部分が心理学であり、著者は心理学によって教育の学問的体系をたてることを試みた、とされている<sup>8</sup>。そこから、心理学以外にも、社会学や学校行政学などのさまざまな分野が付け加えられ、今日のような総合的・複合的な学問に発達していった。このように、教育学自体の定義も、時代によって、変化している。

表3 教職課程と勝田教育学との比較

領域	教職課程に規定されている科目名	勝田教育学における研究内容 （「」は、領域名を示す。）
教職の意義等に関する科目	教職の意義及び教員の役割	「教育的諸価値とその実現過程の研究」 ①教育概念の形成と教育的諸価値の吟味 ⑤教師についての研究 「教育の歴史的研究」 ①教育的価値の成立
	教員の職務内容	「教育的諸価値とその実現過程の研究」 ⑤教師についての研究
	進路選択に資する各種の機会の提供等	「教育的諸価値とその実現過程の研究」 ②教育目的の現実的規定 ⑤教師についての研究
教職の基礎理論に関する科目	教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想	「教育的諸価値とその実現過程の研究」 ①教育概念の形成と教育的諸価値の吟味 ②教育目的の現実的規定 「教育の歴史的研究」 ①教育的価値の成立
	幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む。）	「隣接諸科学との接点」 ①発達および学習の心理学的研究 ②学習と人間形成の社会学的研究
	教育に関する社会的、制度的又は経営的事項	「教育的諸価値とその実現過程の研究」 ②教育目的の現実的規定 ④制度および政策研究
教育課程及び指導法に関する科目	教育課程の意義及び編成の方法	「教育的諸価値とその実現過程の研究」 ③教育の内容および方法の研究 「隣接諸科学との接点」 ①発達および学習の心理学的研究 ②学習と人間形成の社会学的研究
	各教科の指導法	
	道徳の指導法	
	特別活動の指導法	
生徒指導、教育相談及び進路相談等に関する科目	教育の方法及び技術 （情報機器及び教材の活用を含む。）	「教育的諸価値とその実現過程の研究」 ⑤教師についての研究 「隣接諸科学との接点」 ①発達および学習の心理学的研究
	生徒指導の理論及び方法	
	教育相談の理論及び方法 （カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）	
	進路指導の理論及び方法	

そして、日本の現行の教職課程と勝田の体系化した教育学の比較はあながち無駄ではなかった。なぜなら、これにより教育の方法論についての科目が多いということが明らかになったからである。その背景には他国と比べて日本の教育実習の期間が短いという傾向があろう。それゆえ、学問によってその技術を学ばせ、まずは知識として定着させることを期待しているからではないだろうか、ということが推測できる。しかし、そのような意図があるにせよ、本当に講義のみで実習や経験の少なさをカバーすることができるのだろうか。

今日の教職課程は、文部科学省が規定しており、教職に就くことを希望する者は、否応なくその規定された内容を履修することになる。それゆえ、教職課程について、履修者が科目構成や科目内容についてじっくりと考える機会は少ないのではないだろうか。しかし、教職課程は教師の準備期間ともいえる重要なカリキュラムであろう。今一度、

教職課程で取り扱われている科目内容を検討し、その内容について自ら学ぶという姿勢が一人ひとりに求められているのかもしれない。

#### <謝辞>

本研究ノートは、修士課程に入学してから取り組み始めた勝田守一研究の一部をまとめたものである。その過程で、勝田教育学と呼ばれる勝田の教育学の深い知見について学ぶことができた。また、学部生時代に筆者が履修した、教職課程の科目内容について考える良い機会にもなった。このような機会に恵まれたことに、まずは感謝したい。さらに、昼夜を問わずに常に親身に指導して下さった、学部生時代からの指導教員である山崎洋子先生とタイトルや形式についての助言を下された矢野裕俊先生、大津尚志先生など、多くの方の協力を得て執筆できたことに対して、この場を借りて御礼申し上げたい。

#### —注—

- 1 共著、訳本を含む。
- 2 勝田守一『教育と教育学』岩波書店, 1970, p. 3.
- 3 勝田守一「教育の概念と教育学」勝田守一、森田盾三郎、山住正己、斉藤浩志、伊ヶ崎睦生、倉内史郎著『教育学』青木書店, 1958, p. 45.
- 4 前書 pp. 45 - 48.
- 5 前書 pp. 48 - 49.
- 6 前書 pp. 49 - 50.
- 7 海後宗臣「教育学」中弥三郎編『教育学事典-第二巻-』平凡社, 1955, p. 20.
- 8 前書 p. 20.